

〈企画・制作／静岡新聞社地域ビジネス推進局〉

# コロナ禍でがんはどう向き合うか



静岡県対がん協会

9月はがん征圧月間です。国民の2人に1人はかかると言われているがん。新型コロナウイルスの影響で病院や診療所への受診控えが増え、早期発見・早期治療につながる検診や受診率の低下が懸念されています。コロナ禍でがんはどう向き合うのか、医療現場、がん患者の立場からそれぞれお話を伺いました。

## がん検診と日常診療で 早期発見・早期治療を

### コロナ感染と がんの死亡率

「コロナ禍におけるがん患者の現状についてお話しください。」

**山口** 日本での新型コロナウイルス感染症の死亡率は1.17%、これに対しがんの場合は医療機関がベストを尽くしても40%です。日本で新型コロナウイルス感染が始まって20カ月余り。この間、静岡県内では1日平均で32人が感染し0.29人(8月24日現在)が亡くなっています。一方、がんの実態を見ると、1日平均76人が罹患し30人が亡くなっています。新型コロナウイルス感染症を軽視してはいませんが、がんによる死者数はコロナ感染症の100倍です。医療機関の努力と、がん検診などによる早期発見・早期治療によりがんの治癒率は6割まで上昇しています。がん検診や日常診療をおろそかにしないことで治癒率をさらに1、2割向上させることができます。

「患者会でも不安の声が出ていますか。」

**星野** あげぼの会でも3密回避のために会合やキャンペーンを全て自粛しています。相談に乗ってほしいという方には電話やオンラインでの交流会を実施しています。院内感染やクラスターの報道が出るたびに、病院に行くのをためらったり、手術や治療を先延ばししたいという声も聞かれますが、自己判断するのではなく、必ず主治医の先生に相談するように呼びかけています。



静岡県立静岡がんセンター  
山口 建 総長

定期間免疫力が下がりますし、抗がん剤治療中の患者は免疫力がかなり落ちます。放射線治療も骨髄の免疫細胞をたたいてしまうことがあります。ですから院内でかなり厳しい感染対策を取っています。



あげぼの静岡(患者会)代表  
星野 希代絵 さん

### 受診控えでがん発見の 遅れを懸念

「日本対がん協会の調べによりますと、2020年のがん検診の受診率が前年比で30%減少したそうです。」

**山口** 新型コロナウイルスの感染が拡大してから、がんの発見率は落ちていきます。がん検診の受診率の低下に加え、かかりつけ医への受診控えにより、がん発見が遅れるケースが増えています。がんが見つかるとはがん検診が3割、日常診療によるものが7割程度といわれています。日常診療の中では、自覚症状、前がん病変の経過観察に加え、他の病気の検査の際に偶然発見されるケースが意外と多いのです。がんの予防に努め、がん検診を受け、自覚症状に気づけば、相談できるかかりつけ医を持つことが大切です。

「がん治療はいかがでしょう。」

**山口** 静岡がんセンターのがんの手術件数は2019年に4525件、20年に4394件と若干低下していますが、抗がん剤治療の8割を占める外来治療はむしろ増加傾向にあります。治療中のがん患者は新型コロナウイルスに非常に弱く、重症化リスクを抱えています。手術の場合は一定期間免疫力が下がりますし、抗がん剤治療中の患者は免疫力がかなり落ちます。放射線治療も骨髄の免疫細胞をたたいてしまうことがあります。ですから院内でかなり厳しい感染対策を取っています。

### コロナから がん患者を守る

「静岡がんセンターでは、がん患者本人はもちろん、がん体験者、同居家族まで、新型コロナウイルスに感染したら受け入れてくださるそうです。」

**山口** まずはコロナからがん患者を守るのが最優先です。がんサバイバー(がん治療中の人、治療を終え経過観察に入っている人、治療体験者やその同居家族が罹患した場合にも受け入れています。県の要請で病床を増やし、コロナに感染したがん患者を中心に受け入れていますが、患者が多く今は満床です。また県内には23のがん診療連携拠点推進病院がありますが、他の病院でクラスターが発生した場合のがん患者も受け入れてきました。仮に、院内感染によって病院の使用率が6、7割に制限されてしまうと救える命も救えなくなってしまう。厳重な病棟管理をしながら早めに抗体カクテル治療を行って重症化を防ぐ準備を進めています。

「患者側は正確な情報が必要ですね。」

**星野** コロナ禍のがん患者には何より正しい情報が必要で、あいまいな情報に振り回されて勝手に自己判断しないよう強く呼びかけていきたいと思っています。

**山口** 国のがん対策推進協議会では、次期の基本計画で情報提供を重視する予定です。すでに、静岡がんセンターでは「情報」の処方」という考えで情報提供を進めてきました。病気に必要な情報は患者の選択に任せるのではなく、お薬を処方するように医療スタッフが患者ごとに必要な情報を処方することを目指しています。

## 患者・家族ともに早めのワクチン接種を

静岡県立静岡がんセンター 感染症内科 倉井 華子 部長

「がん患者は新型コロナウイルスの接種をしても問題はないのでしょうか。」

ワクチンほどのような状況であっても接種することをお勧めします。手術を直前に控えている、抗がん剤を投与する日を守るなど、受けられるタイミングを主治医と相談して接種を受けてください。抗がん剤治療中



静岡県立静岡がんセンター 感染症内科  
倉井 華子 部長

あつても、ワクチンの副作用が強いことはありません。感染症は新型コロナウイルスだけではなく、この後インフルエンザもやってきます。がん患者は免疫力が低下していますので、身を守る予防接種があれば、ご本人・ご家族含めて積極的に受けていただくことが大事です。

「コロナ禍で健康維持も難しい状況です。」

受診を控えて家に閉じこもつてばかりでは、落ち込むこともあるし、かえってマイナスに影響することもあります。基礎体力のあるなしで新型コロナウイルスに罹患した場合でも回復のスピードが違います。肥満も重症化リスクの要

### がん検診と正しい知識の重要性を実感 原千晶さん

私が初めてがんになったのは30歳の時。それまで病院に行ったこともなければ、検診の存在すら知りませんでした。円錐切除という子宮の入り口を一部摘出する比較的軽い手術で、その時初めて子宮頸がんという病名も知りました。術後、主治医は子宮の全摘を勧めましたが、子宮を失う覚悟ができません。月1回の経過観察という約束と引き換えに全摘手術を回避しました。術後2年間は通院を守り経過も良かったのですが、だんだん過信に変わり3年経った時には病院から足が遠のいていました。

出しなかったのか。自分の間違いで、いまや大きな手術が必要だと知らされたとき、早期発見・早期治療に勝るものはないと実感しました。検診の重要性、正しい情報を得ることの大切さを身をもって知ったのです。私の良くない例を皆さんにそのままお伝えすること、少しでも検診を受けようと思ってくださいる人が増えたらと思っています。

主治医やご家族、友人と相談し、たくさんの方の考えや知恵を借りるべきです。どうか自分の体を第一に考え、気持ちを尊重すべき時とそう言っている状況でない時の判断をどうか誤って欲しくないとぜひお伝えしたいと思います。

5年後に体調を崩し、今度には子宮体がんが見つかりました。なぜ通院をやめてしまったのか、それ以前になぜ子宮を摘

2度目のがんの時にはステージ3まで進行し、命と引き換えに子宮を摘出することにになりました。医療が進んで、がんは治る病気になったといわれますが、一度進行してしまつと再発や転移を繰り返す命に関わってきます。迷う気持ちには本心に理解できますが、やはり



**PROFILE**  
1974年北海道生まれ。20歳で芸能界デビュー。2005年に子宮頸がん、10年に子宮体がんを患い、11年に婦人科がん患者会「よつばの会」を立ち上げる。現在は患者会代表、タレントとしてがん啓発活動に取り組み。著書に「原千晶さんと私、明日の私、キレイな私」(光文社)

ら感染するかもしれないという考えはやめて、自分が必要だと判断した時には怖がらずに検診を受けていただきたいと思います。